法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-01

共通テーマ「2009年スポーツあれこれ雑感」：ワールドカップ前夜

清雲, 栄純 / Kiyokumo, Eijun

(出版者 / Publisher)
法政大学体育・スポーツ研究センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学体育・スポーツ研究センター紀要 / 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要
(巻 / Volume)
28
(開始ページ / Start Page)
51
(終了ページ / End Page)
51
(発行年 / Year)
2010-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007579

共通テーマ
「2009年スポーツあれこれ雑感」

法政大学体育・スポーツ研究センター紀要　28. 51-51(2010)

ワールドカップ前夜

清　雲　栄　純

2009年の日本サッカー界は変革の年となった。前回の2006年ワールドカップ・ドイツ大会でジーコ監督率いる日本代表は2002年日韓大会のベスト16を上回る成績を期待させたが、一勝も挙げる事が出来ず予選リーグ敗退と、サッカー関係者ばかりではなく多くのファンやサポーターに大きな落胆と失望を抱かせた。その巻き返しを誓って日本サッカー協会は2010年南アフリカ大会のアジア代表を目指し、オシム監督を招聘する。オシムJAPANは「人もボールも動く」アクションサッカーで新風を吹き込み、日本中のサッカーに関わる人たちに大きな希望を抱かせた。しかし、志半ばでオシム氏は病に倒れる。この窮地を託されたのが1998年フランス大会に日本を初めてのワールドカップに導いた岡田監督である。この要請に対して『悩むことなく即決した』と本人が語るように千載一遇のチャンスと捉え、オシム監督が取り組んで来たサッカーの継承に全力を注いだ。だが、2008年の3次予選では格下のタイ・バーレーン・オマーンに大苦戦し、オシム氏との采配の差を指摘され窮地に追い込まれる。岡田監督は悩んだ末に「オシムサッカー」からの脱却を決断する。オシム氏のアドバイスを断り、最終予選を迎えるまでの3ヶ月間を利用して友人でもあるイタリア代表・リッピ監督をはじめヨーロッパで活躍している名門チームの監督と接触して見直しを図る。同時に選手の意識改革を実践するために国内の著名な脳外科医とも勉強会を重ね「オシムサッカー」の呪縛からの解放と同時に岡田サッカーの構築に全力を注いだ。そのチャレンジは最終予選の初戦であるバーレーン戦で早くも現れた。アウエーにもかかわらず立ち上がりから玉田（名古屋）・田中達（浦和）・中村俊（セルティック）・松井（グルノーブル）ら前線の選手は、ボールを奪われた瞬間に相手を追いかける意識が非常に高かった。この結果、日本はバーレーンより疲れない戦いが出来た。最終予選に欠かせないチームのベースを得た印象だ。ボールを失ってからの瞬時の切り替えは、長い距離を走って敵の背中を追いかけずにすむ。対するバーレーンは切り替えが遅く、日本へのマークが緩くなり長い時間日本の選手を迫い、体力を消耗した。猛暑下での攻守の切り替えを貫いての勝ち点3はW杯出場に向けて収穫の多い試合となった。日本はこの後のカタール戦でもアウエーで勝利する。守備の中心であるGK楢崎（名古屋）とキャップテンでDFの中心選手の中澤（横浜M）を故障で欠くハンディを負った中での不安をかかえての闘いであったが、逆に強さを印象付けたチームは大きな自信を獲た。守備ではパーフェクトに近く相手の技術やアイデアを出させない同時性は予選リーグで一番の完成度を見せた。中村俊（セルティック）が守備に入る切り替えの速さがその象徴で、日本の目指す部分がすべて出た。また、ボールを持っていない選手の縦へのフリーランニングも質が高く、適の守備陣を困惑させた。まさに岡田監督が目指す「ボールも人も動くサッカー」の新しいチームへと変身した。このアウエーでの2試合は相手のペースに合わせず、常にイニシアティブを取り闘い抜いた結果は選手達に自信から確信に変える試合となった。その蓄積は6月6日のアウエーでのウズベキスタン戦で花開き、記憶に残る試合となった。試合開始から岡崎（清水）らFW陣が相手守備ラインの裏へのフリーランニングで相手の機先を制した。この試合で負ければワールドカップ出場が消えるため、点を取ろうと前に出るウズベキスタンの攻撃を分断し勢いを半減させた。その動きを支えたのがＭＦ陣である。中村憲（川崎）を中心に攻撃を組み立て、長谷部（ヴォルフスブルグ）は守りに力を注ぐ、遠藤（G大阪）のセカンドラインから（のシュートで）決定機をつくるなど、お互いの持ち味を引き出した。そこに中村俊（セルティック）がアクセントを与え、日本のリズムを作り出した。最終ラインも中澤（横浜M）・闘莉王（浦和）を中心に高い位置をキープできていた。相手が得意としているリ・スタートでの守備もしっかり競り、セカンドボールを奪えていた。奪われた後の守備への切り替え、奪った後のダイレクトプレーがずい所に見られ、戦術がはっきり見えるようになった。これまでの日本の攻撃はセットプレイが目立っていたが、それに加えて流れの中で決定的な仕事ができるチームに成長した。この勝利で日本は『ワールドカップ4大会連続出場』を果たす。しかし、アジア予選の最終戦では中澤（横浜M）・遠藤（G大阪）・長谷部（ヴォルフスブルグ）・中村俊（エスパニョール）を欠くベストではないメンバーではあったが最大のライバルである豪州には勝利する事が出来なかった。前半は豪州の高さと強さを厳しい守備でしのいだが、後半は違うチームになってしまった。1点を追う相手のパワープレーに守備の連動がなくなり、完全に組織を分断された。その「漏れ」が一瞬の隙を生み、ファールを犯すことで相手の強みを出させてしまった。ペナルティーエリア内での正確性や判断の早さも豪州とは差が出ていた。残すところ南アフリカワールドカップ開幕まで半年。日本の対戦相手はすべてFIFAランキング上位チームである。準備する時間は限られているが、個を強くすることと同時にバックアップ・プレイヤーのレベルアップや攻守にわたる連動がフレキシブルに発揮できる事が世界に近づくキーワードになる。ワールドカップでの「ベスト4」を目標に掲げた岡田JAPANのこれからの取り組みに注目して行きたい。